

『偽りの無精子症く優しき夫の狂愛、
その全てが計算さ
れた罠く』 サンプルテキスト

プロローグ 逃げられない愛の巣

「君はまったく子供は欲しくないっていつてたけど。ほら、ちゃんと次の赤ちゃんもちゃんと来てくれるように中にいっぱい出してあげるからね？ 君と僕の愛の巣にいっぱい赤ちゃんきてもらおうね」

「だめっ、だめっ♡♡……やつ♡ん♡♡♡♡」

なんで、こんなことになっちゃったんだろう。

本当にどうして？

「僕から離れるなんて絶対に許さないから……」

第一章 二年ぶりの体温と夫の欠落

「ただいまぁー」

珍しく上機嫌で帰ってきた夫に少しびっくりして出迎える。

結婚して五年目、子供はいない。

というか、結婚しても二年前から私たちの夫婦関係は冷えていた。お互いに仕事忙しいこと、すれ違いの日々にお互いが必要としているかというところなことはなかった。結局、二人で暮らすのが最もコスパの良い生活だからずるずると暮らしていた。完全に私たちはレスになったのは子供のことだった。夫のナツくんは子供が欲しかったけれど、私は子供を欲しいとは思って

なかった。自分がしつかり子育てできるのかということとこれからの自分の人生を考えたら子供を望むよりも私は自分のキャリアを優先したかった。この決定打でナツくんとはレスになつてしまつたし夫婦仲も悪くなつてしまつたと思う

ナツくんが浮気でもしてくれれば、慰謝料を貰つてもう少し悠々自適に生活できるのにも思つてゐるけれど、彼にはそんな気配すらない。ナツくんは普段眼鏡をかけてゐるからわからないけど顔立ちがよく、未だに女性から言い寄られてゐると思うけど何故かそんな気配がない。私とそういうことにならないし、女性の影も全くないことに私は違和感を覚えて少し高かつたけど興信所をお願いしたけど調査結果は真つ白だつた。

ナツくんとは嫌いではないけれど、最近は好きなのかどうかもわからなくなってきた。一緒にご飯を食べたのはいつだっただろうか……？一緒に笑い合ってたのは？ナツくん到最后に触れたのはいつだっただろうか。

ここ二年全くと云つて思い出せないほど私はナツくんにときめきもドキドキも感じていなかった。

ただの同居人という気持ちかもしれない。けれど上機嫌のナツくんに話しかける。

「ご飯食べた？」

「うん、少しだけ食べた。けど、君の作ったラーメンかお茶漬けが食べたいなあ」

こんなわがままをいうなんて珍しい。

私の作ったラーメンかお茶漬けつてそれ即席のやつなのに嬉しいのかなと思ひながら、久しぶりのわがままに私はネギを刻んで、ハムを乗せ、卵を落とした即席のラーメンを作っていた。ラーメンを作りながらふと、私はやっぱりナツくんのことが好きなんだなと思つてしまつた。こんな夜中に帰つてきて即席だけど、ハムと卵と刻みネギが入つてゐるラーメンなんて豪華なもの作つてゐるんだから。太るかも知れないけど私の分も作つていた。ラーメンが出来上がつてテーブルに彼のラーメンと私のラーメンを置いて、

「わあ、美味しそう。ハムとたまごが入つてゐるなんて豪華だね」

ナツくんはいただきますと言つて、思つたよりお腹が

空いていたのか思いつきりラーメンを啜って、眼鏡が一気に曇りながらそういうナツくんにくすくすと笑ってしまった。私も一緒にラーメンを啜る。結婚する前も何回かこうやって夜食を一緒に食べたことを思い出した。あの頃の思い出がキラキラと蘇る。

「君も一緒に食べるなんていつぶりだろう？」

「さあ、長いことなかったんじゃない？」

お互いにいただきますと言って向かい合ってご飯を食べるなんていつぶりだろう。嬉しい気持ちと少し気恥ずかしい気持ちでラーメンを啜る。夫もラーメンを啜りながらにこにこ嬉しそうだった。

少しお酒が入ってるのはわかるけれどこんなに上機嫌な夫はいつぶりなんだろうと思いつながらラーメンを食べ

終わつた。

★★★

私は食べ終わつたものを洗っていると、ナツくんはお風呂に入つてくるとそのままお風呂に行つてしまつた。酔つていたから氣をつけてねとだけ声を掛けた。洗ひ物が終わつて、いつもなら声も掛けないけど夫にもう遅いから寝ると声をかけて寢室へと。

ナツくんがシャワーを浴びてる音を聞きながらベッドに入つて暫くするとウトウトと眠りについていて、かちやりという寢室のドアを開ける音で半覚醒した。

ふわふわと、眠いけれど起きれないそんな状態。

髪を拭く音と一緒にお風呂から上がりたての匂いが鼻をくすぐる。

「もう寝ちゃった？」

ナツくんが髪をタオルで拭いてる姿、腰にタオルしか巻いてない。でもしつかり眼鏡だけは掛けてる姿が見える。ナツくんの問いかけに起きていると言いたいのにまだ覚醒には遠そう。ただ、身体が身動いた。ギシッとベッドが音を立てる。ナツくんが覆い被さってきた、頬にちゅつという感触がしてぱちりと目が覚めた。久しぶりの感触に頬を押さえて、真っ赤になりながら体を起こしようとする。ナツくんは少し強めに私の肩を掴んでベッドに私の身体を沈める。

「お願い。俺が酔っ払ってることの所為にしていいから」

絞り出すような声にびっくりしてると

「抱かせて欲しい」

「ナツくん……」

「久しぶりに呼んでくれたね」

眼鏡をくいと直すと見つめられて心臓がときどきと鳴り出す。

ゆっくりと手が伸びてきてパジャマのボタンを外された。ナツくんの手を握って

「待って！ちよつと待って！」

そういうことするとは思ってなかったから勝負下着を着てないことに気がついてナツくんの手を握って止めてしまった。ナツくんはすぐく真剣な顔をして、眼鏡の奥の瞳は怖いくらいに見つめられ

「あのさ……、俺……」

ナツくんは今までとは全然違う雰囲気です。私に何か言ううとしています。かなり言いにくそうなんです。うと思つています。

「……俺、どうも無精子症らしい。だから……もう子供は望めないらしい」
「え……」

——それが、優しき夫が仕掛けた、底なしの泥濘への入り口だった。

嘘の告白、甘いサプリメント、仕組まれた検査薬。逃げられない愛の巢の真実は、ぜひ本編でお確かめください。

奥付け

作品名: 偽りの無精子症～優し
き夫の狂愛、その全てが計算され
た罠～

著者名: つばあゐ。

イラスト: 朝霧ゆう

発行日: 2026年6月26日
(第一刷)

連絡先: <https://www.pixiv.net/users/23830593>

禁止事項: 「無断転載・AI学習
禁止」